

千鳥川

泉鏡花作

上

「おかみさん。心中のあつた處ださうだね。何だか氣の毒らしくつて、好い景色だとも言へないやうな氣がするな。」

夕陽にかざした小手を拂つて、客なる學生は差置いた猪口を取上げた。

「嘘でございますよ、あなた、案内者をお連れなさいましたか。」

「可哀相に、御覽の通りの椋鳥だけでも、汽車といふ重寶なものであるお庇には、今はじめての参詣ではない。」

店頭へ床几を据ゑた、土間に掘立の柱につかまつて居る女房、仰山に胸を反らして、

「あら、まあ、飛だことをおつしやる。然うではございませんけれど、大方案内者が、そんなことを申上げたんでせうと思ひます。」

「其では間違つて居るのかい。」

「まるで、貴下、嘘なんでもございますもの。」

「でも何だぜ、新聞にさへ委しく出て、一時大騒ぎをやつただぜ。」

「其は貴下、心中のあつたのは眞個でございますけれど、何も彼の鱗岩からではございませぬ。」

此のさきの千鳥川の川下へ身を投げたのでございませぬ。それぢや些とも引立ちませんから、あゝやつて此の土地へさへ入らつしやれば、直ぐ誰方でも目につきませぬ、御覽なさいまし、彼の通り、

立つて居て伸上る、女房の目には望むべく、胡坐で居て、俯向く學生の目には瞰すべく、島山の根をさら／＼と噛んで、恰も霜柱の崩れるやうな、浪打際を稍離れた邊、五尺海面を抜いて五十疊數ばかりの一座の岩、一脈、一秒に波が被つて、たら／＼と其の上を走るが、折からの夕焼に金を溶かして流せる如く、又、右より、左より、前より、後より、悠然と然も隙なく、静かに然も強く、和かに然も揺れて、乗上り、躍越し、引返し、溢れかゝり、ざつと引いてやがて打ち打ち打寄する、  
「水と水と相合ふ處々、水銀を投げて碎くやう、然も周圍は、緑青の濃き慎重雄大な色を湛へて、恰も一條の青龍有り、

其の岩の根に棲んで、其の折を一個々々、潮に呼吸つく毎に、海はたゞ彼處ばかり常に大動揺をするが如くである。

「彼でございますから、貴下、龍の鱗岩と申しますと、津々浦々まで聞えて居りますので、評判の立ち好いやうに、新聞で拵へたのでございますとさ。」

「然うか、成程、」と、他に思ふことのあるらしい、生返事を為ながら、今なほ瞻つて居た鱗岩から目を返して、

「ぢやあ其の、」  
一口飲み、

「川下だね、抱合つて入つたのは。而して千鳥川といへば此處へ来る路に、川つゞき、山の下まで早船が出る、彼處だらう。」

「然やうでございますよ。」  
「はてな、」

學生は膝で割つてはさむやうにして居る、膳の上の箸を取つたが、謂ふことに實が入つたか、其のまゝ山置き、

「千鳥川と聞くと恐ろしく寒くつて凄さうだが、いや一向なものぢやないか。葡萄になつたつて、急

に沈みさうにも見えないぜ。」

「貴下、潮がさしひきをいたしますよ。其に丁ど心中したのは引潮時でございましたから、ずるずると海へ奪られましてね、死骸は、何でございます、此の沖で上りました。」

學生は頬に手を當て、

「はあ、潮のさしひき、いや、大うかつ。薩張其

處へ氣が着かなかつた、潮のさしひき。．．．．

おお、然う云や、杯の引潮時だ。」

と手酌で注ぎ足して、呵々と笑つた、怪しからず、可い機嫌。

女房は餘り機嫌がよくない。何故なら、書生客と、土間を僅ばかり隔てた、此の岩端の掛茶屋の其の一番海に臨んだ端の床几に、貴なる美しい令嬢一人、女中が二人ついたので居るから。

利害失得、之に酒客を置くのは、彼處の茶代に關する、と思ふので。

下

「お銚子はいかゞでございますね。」

其にもせよ、取合はずに居ては、何時まで飲んで居るか知れないので、女房が自分に、お銚子の區切をつけに來たのであつた。

「未だある、女房さん、お酌には及ばないが、まあ話し給へ。えゝと、恚う斬つたり、はつたり、人の生命にかゝはるやうなことは、都會にはいくらもあるが、こんな邊鄙だから嘸其の時は騒いだらう。」

「そりや、随分騒ぎました、」

「どんな風だつた、おかみさん、見たか、」

「さあ、見ましたとも、死んで上りました時は存じませんが、心中をします日の晩方、二人づれでお參詣をして、その時私もへ一寸休んだのでございますもの、」

學生は乗出して、

「様子は？ 些ともそんな様子は無かつたかね、」

「何ですか、貴方、榮螺でも召食りませんかなんて申しまして、あゝ、あゝツたツ切、上げて可いんだか、悪いんだか分りません位、二人とも中で返

事を<sup>じ</sup>して、上<sup>あ</sup>の空<sup>す</sup>でも居<sup>い</sup>るやうでしたツけ。少<sup>す</sup>い同<sup>どう</sup>士<sup>し</sup>夢<sup>む</sup>中<sup>ちゆう</sup>なんせう。それ<sup>に</sup>、女<sup>むすめ</sup>の方<sup>ほう</sup>は、テキ八<sup>はち</sup>キもの<sup>を</sup>を言<sup>い</sup>ひ得<sup>え</sup>ませんし、大<sup>お</sup>方<sup>ほかた</sup>、極<sup>き</sup>が悪<sup>あく</sup>いんだらうと思<sup>おも</sup>つて居<sup>い</sup>ましたがね、な<sup>あ</sup>に、男<sup>なん</sup>は尋<sup>じん</sup>常<sup>じやう</sup>の方<sup>ほう</sup>なんださうですけれど、女<sup>むすめ</sup>と來<sup>き</sup>た日<sup>にち</sup>にや、良<sup>よ</sup>い家<sup>いえ</sup>のお嬢<sup>ぢやう</sup>さ<sup>う</sup>で、立<sup>りつ</sup>派<sup>ぱ</sup>な學<sup>がく</sup>校<sup>かう</sup>の生<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>さんだといふのに、飛<sup>とび</sup>だ浮<sup>う</sup>氣<sup>き</sup>もんださうですよ、行<sup>ゆ</sup>きがけの道<sup>たう</sup>づれにされたのでござ<sup>い</sup>ます、而<sup>し</sup>して些<sup>い</sup>とも容<sup>きり</sup>色<sup>やう</sup>が好<sup>す</sup>かないんだから厭<sup>いと</sup>ぢやありませんかね。」

「だツて、欺<sup>あ</sup>されたと言<sup>い</sup>ふわけでもなからう。思<sup>おも</sup>合<sup>あ</sup>つた中<sup>ちゆう</sup>なればこそ、心<sup>しん</sup>中<sup>ちゆう</sup>もしたし、又<sup>また</sup>死<sup>しが</sup>骸<sup>がい</sup>さへ女<sup>むすめ</sup>の扱<sup>し</sup>帯<sup>てい</sup>で結<sup>けつ</sup>合<sup>ごう</sup>つて居<sup>を</sup>たといふぜ。」

「其<sup>その</sup>が皆<sup>みんな</sup>、こましやくれた女<sup>むすめ</sup>のさし金<sup>かな</sup>でございます。いゝえ、皆<sup>みんな</sup>知<sup>し</sup>つて居<sup>あ</sup>ります。ついで此<sup>こ</sup>のさきの、増<sup>ま</sup>屋<sup>や</sup>といふ旅<sup>は</sup>籠<sup>たご</sup>屋<sup>や</sup>のお客<sup>きやく</sup>で、四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>目<sup>もく</sup>逗留<sup>とうりゆう</sup>をするといふ話<sup>はな</sup>だつたのが、學<sup>がく</sup>校<sup>かう</sup>の都<sup>つ</sup>合<sup>がふ</sup>で、急<sup>いそ</sup>に終<sup>あ</sup>汽<sup>わ</sup>車<sup>きしや</sup>で東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>へ歸<sup>かえ</sup>らなければならぬと言<sup>い</sup>ひだしましたさうで、其<sup>その</sup>がもう日<sup>ひ</sup>が暮<sup>く</sup>れてからでござ<sup>い</sup>ましたもの<sup>です</sup>から、番<sup>ばん</sup>頭<sup>とう</sup>が提<sup>ち</sup>灯<sup>ちゆう</sup>をつけて、千<sup>ち</sup>鳥<sup>どり</sup>川<sup>かわ</sup>筋<sup>すじ</sup>を村<sup>そん</sup>はづれの立<sup>たて</sup>場<sup>ば</sup>ま<sup>で</sup>見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>りました。

其<sup>その</sup>のあとで、又<sup>また</sup>あとへ引<sup>ひ</sup>返<sup>かえ</sup>して、川<sup>かわ</sup>下<sup>しも</sup>から這<sup>こ</sup>入<sup>はい</sup>り

ました様ですが、其の番頭なぞも然ういひます、旦那の方は内氣な優しい方でしたつて。

だから、御覽なさい、はじめは、あれ彼處に、と、女房は山の方を見返つた。白布を引いて磯形に上へ並んで、虹の如く、岩の狭間に途切途切の故道を横切つて、遙に一條の濃き煙、胡粉を以て描けるやう、そよとも靡かず。其の邊から黄昏れて、岩間々々の波暗く、榮螺の背に暮れかゝつて膳の上がうら淋い。「あの海草を焚いて居ります、彼處等が、合葬場で、死骸は假埋になりました。

後で知れたのでございますが、なか／＼貴下、其の女の家は、急に名の知れませんがやうな身分ではないのですけれど、最う親達も、家の恥と、打棄つて置くのでございませう。男の方は御親類の方が、直ぐに駈けつけてお見えになりました、早速掘起して立派にお引取りなさいました。」

學生は眉をあげて、

「女の死骸は、」

「其のまゝでございます。身を結へつけた上に、未だ、黒髪の水にほぐれたのが、恐い、男の肩をひつたりと巻いて、女の方からしつかり抱ついて死ん

で居たと云ふんでございますよ。そんなしだらで男をそののかして、慾の深い、貴下、何うぞ死骸は一所に葬つてくださいますと、お役人宛に女の手で遺言がしてあつたんださうでございます。憎いぢやございせんか。

其の遺書が、村役場に大事に了つてあつたのを、男の方の御親類に見せましたものですから、叔父御だといひましたね、書記官とかを遊ばす、御身分のある方が、憎い阿魔だ、と齒がみを遊ばして、引裂いてお棄てなさいましたさうでございます。可氣味ぢやございせんか。

あとで胸も乳も露出のまゝで、阿魔つ兒は一人ぼつち、舊の投埋、ほんとに唾でも引かけてお遣りなされば可かつたと、其時もお供をした増屋の御主人、番頭さんも然う申します。

「ま、ま、待て。」  
學生は、女房の行きかけたのを、猪口の雫を切りざまに、斜めに手を振つて遮つた。

「待て、氣の毒千萬。そんな分らず家が揃つて居るから、若木の枝を撓め枯らすやうなことにもなるのだ。可、親類の者は、身臍肩や、身内の可愛さに



目も眩まう。但、此處へ遊びに来るものが、自然お  
かみさん、お前の話なぞを聞いたら、嘸ぞ皆可哀相  
だといふだらう。彼の鱗岩を弔ふ者もあらうし、舊  
道を通がかりには、路傍の草なりと、手向ける人が  
澤山だらうね。」

「否、貴下、誰がそんな間違つた、第一、身を投  
げたのは彼の岩からではないと申しますと、何だ馬  
鹿々々しい、とおつしやいます。心得違ひなどとい  
ふ方もあり、業曝などといふ方もございますね。つ  
い此の間も、其の女の、學校ともだちの、皆様、蝦  
茶のお袴を召したお嬢さんがお三方で、島遊びにお  
いでなさいましてね、其の話が出ますと、私たちは  
もう舊から交際は為なかつたとおつしやいましてね。  
抱合つて死ぬなんて何といふ醜態だらう、學校の名  
なんか出されて、ほんとうに友達の外聞だ、聞くの  
も厭と、耳を為さへるやら、目をかくすやら、貴下、  
口を袖で塞ぐやら、ほんとうに學問を遊ばした方は  
豪うございますよ。それから貴下、黙つて居れば可  
うございましたましたけれども、ついお話の序に、心中が  
此店で休んで参りました、と申しますと、えゝまあ  
汚はしい、同一家に休んだといつて、袖を拂つたり、

裾を振つたり、鶴龜々々をして、さつさとお歸りな  
すつたので、私も氣がつかまりましたものでございます  
から、蓮蔀ながら心中の休んだ床几に、鹽をバラ／  
＼とふりましてございます、もう些ともおきづかひ  
はないのでございます。」

「いや、戲談ぢやない。」

と學生は擲つ如く、ひたりと杯を俯向けに膳に伏  
せ、

「汚らはしいも凄じい！お茶ツびいめら。尤もな、  
蝦茶なんか穿いてた日にや、身を投げたつて、龍宮  
で門前拂だ。」

と激しく聲高にいつた。・我ながら、別座の客  
に氣がさしたか、學生がフト後を見ると、岩端に立  
つて、小形の雙眼鏡を取りながら、球を袖に伏せて、  
すらりと背姿でゝんで居た、世にも麗かな高髻の、  
頸脚の雪のやうなのが、思はずもの思ふ風情で、振  
返つて、卜顔を見合せた。

二人の女中は、二人して、手に手に、しとやかに  
林檎を剥いて居たが、菓子皿を挟んで、向き合つて、  
緋の毛氈の上に正しく坐したまゝ、齊しく莞爾した、  
が、又伏目になる。令嬢はそれなり雙眼鏡を其の

涼い目にあてて、山手の方へ向をかへたが、一度、  
にらしたやうに外して、やがて片手を柱にかけた。  
羅の袖は優しく、時に件の煙とともに、やさしく晩  
風にそよいだのである。

意氣昂然として、

「そんな徒は簀巻にして沈めたつて活返るのだから  
論外だが、可哀相に、死んだものを、くさしかける  
奴があるか。

善にせよ、悪にせよ、まあ、聞け。死ぬといふは  
よくせきだぜ。たとひ、ふしだらにもせよ、又身性  
の悪いものにもせよ、懺悔に消えるとさへいふもの  
を、生きて居られないと覺悟をすりや、罪も報も其  
迄だ。

譬ひどんなことがあつたにしろ、身を棄てたら許  
すべきぢやないか。

現在、命を捧げたものを、其の情を酌まないで、  
親類とやらの奴も然うだ。相手の女をこき下すのは、  
男の恥を曝すんだぜ。死骸になつても黒髪で抱緊め  
て居たあはれなものが、引放されて一人あの路傍へ  
投埋めにされたら、何んな心持がすると思ふ。

一體貴様たちのいひやうが宜くない。女は不身持

だの、死んだ場處が違つてるの。「容色がよくないのと散々に話すから、聞く奴等も鼻のさきで扱ふんだ。嘘でもいゝ、追善菩提のため、飽まで譽める、思ふさま庇つて話せ。」

場處も如何にも、鱗岩で、然も月夜だつたといへ。一度お顔を見上げたものは、私どもはしめ。「思出しては泣きますと何故いつてやらない。」

鹽をふつたやうな了簡方だから、貴様の此の店も繁昌しない。一生榮螺を焚いて終りたくなかつたら、お二方のお休み遊ばした處だといつて、道行茶屋といふ看板でも出して見る、あの鱗岩を築山にして、此の海を庭にする位、三階建に出世をすら、馬鹿な奴だ。

何うせ、くさしついでだと思つて、第一女振が好くないなぞといふことがあるものか。先づ其の容色から譽め立てる、つひぞ見た事のないやうな美しいお姫様でございましたと、「

「ほゝほゝゝ、」  
女房は餘りのことに大笑をして、然も輕蔑したやうに、

「はあ、可うございますから、お静に行らつしや

いまし。譽めませうとも、男の方は、貴下をそツくり、

と馬鹿にする。

學生は、ぢつと見て、

「可し、そして女の方は、」

と片膝立てて、屹と振向き、

「彼處においでなの、あの御婦人を其まゝ、」

「貴下滅相な、途方もない、」

それだからいはぬことか、酔漢と、女房は蒼くなつて、此の罰に茶店が崖から落ちるだらうと思ふばかり蒼くなつた。

學生は自若として、しかし白面に酔ならず、紅を

潮して、

「失禮……失禮ながら、」

「何うぞ、あの、私でよろしくば、」と優しく微笑んで見かへりながら、呆れて茫然とした腰元に、靜に、立つたまゝ其の手なる雙眼鏡を渡したので、一膝出て、跪いて受取つた。

其の時まで、一雙の明眸に映じて居た、故道の彼の煙は、自から下伏になつて、情に平伏すが如くに見えたのである。

【完】